



和の伝統文化にふれる

会員 中村 浩紹 (19 期)

私には、コーヒーブレイクはない。起床して出勤前に緑茶を飲む緑茶党なのである。

70 年前、大学へ入学して和の伝統文化に触れたいと出会ったのがサークル茶道会であった。学生という特権をかざして仲間と臆することもなく裏千家の師匠の門戸を叩き弟子入り指南を願い出て入門が叶った。若気の至りで「お茶ケ」は「お酒」などと屁理屈を捏ね佗茶の茶道と酒道に精進した青春は懐かしい。千利休はこのような若者を念頭にいたであろうか。法律書と向かい合う鬱々とした日々の合間に静寂な空間に身を置き、点茶稽古に向かう「和敬清寂」の時空は、こころを和ませる安らぎの一時でもあった。

後年、京都の「裏千家今日庵（国指定重要文化財）」を訪れその茶室・露地・茶庭に接すると、そのすべてが千利休の客人をもてなす精緻な心遣いで隅々まで整えられていることに感銘を覚えたものである。裏千家第 15 代家元千玄室氏は、（公財）日本国際連合協会会長として永年にわたり「国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール」（令和 5 年度・第 70 回）を主催（後援：法務省・全国人権擁護委員連合会ほか）され、人権感覚を備える国際人に若者達を育成するためにも尽力されている。私は、審査員として参画させていただいた。

残念ながら昨今の街中は、抹茶で憩う場所のごく限られ、軒並みコーヒー店が溢れている。工作中は、事務所で茶筌を振って和敬清寂の心境に浸るしかない。

さて、江戸の庶民生活の中で芸能、謡曲、狂言、民謡など数多の歌舞音曲が和の伝統文化として唄いつがれてきた。「江戸小唄」は、江戸中期頃から短いはやり歌を三味線の伴奏で唄う「古典小唄」として誕生、大正年代にそのジャンルが確立した。

下町育ちの私が弁護士登録するとご近所の通人おばさんに、「これからいろいろなお客様とお付き合いする機会が多くなるから、恥をかかないよう小唄のお稽古をしなさい」と小唄の師匠宅へ連れて行かれ弟子入りさせられてから苦行が始まった。



国立小劇場 筆者（左端）

江戸小唄は、江戸城から辰巳の方角の下町・深川界隈を題材とした粋な歌詞で多く唄われ、往時の習俗や町並みに想いを馳せることができる。「辰巳よいとこ」という曲では、素足に年中羽織を羽織って粋がっていた辰巳芸者を窺い知ることができる。「櫓下」という曲では、江戸市中で幕府公認の遊郭「吉原」以外の岡場所と呼ばれる遊び場の数多あるなかで、仲町、新地、櫓下、^{すそつぎ} 裾継、^{いしば} 石場、^{つくた} 佃、^{どぼし} 土橋の風情が深川七場所として唄われている。さて、その地は何処だろうと探索心が芽生え、江戸俯瞰図を入手し確認すると現在の江東区門前仲町交差点付近に富岡八幡宮の一の鳥居と火の見櫓があり、隅田川に架かる永代橋際から仲町交差点周辺は楼閣が所狭と連なりあっていて知れた。お陰で古地図をもって地域の歴史探訪という往時に夢を膨らませる愉しさが募る。加えて、建替が予定されている国立小劇場にて小唄披露の機会が与えられたのも苦行に耐えたご褒美だったのだろうか。

皮肉にも、現在のこの深川周辺界隈は、外国ブランド名のコーヒー店の進出で「コーヒー・カフェの激戦地」と様変わりしてしまった。今や、世界的なコーヒー豆の消費量の増加でその需要が高まる一方、気候変動の影響で収穫減が予測されることなどから、環境・人権問題を念頭とした「エシカル (ethical) 消費」（倫理的消費）が問われる時代となっている。

一杯のコーヒーを口にしながらフェアトレード問題について考えてみませんか。